大阪国税局長賞

日本と米国の税の比較

大阪女学院中学校３年
寺林　実桜

私は小学生の頃、米国に五年間住んでいた。現地では様々な生活や文化の違いを目の当たりにした。当時はこの差異を事実としか認識していなかったが、最近これには税金が関係しているのではないかと感じるようになった。

日本の学校では毎年四月、新品の教科書が配られるのは当たり前のことだ。米国から帰国し、初めて日本の教科書を受け取ったとき、私は教科書の裏に書いてある文に目が留まった。そこには「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待を込め、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう」と書かれていたのだ。私は非常に驚いた。なぜなら米国の税は、新しい教科書を買うためには割り当てられず、米国の生徒は、年季が入り、破れや汚れにより見えにくくなっている教科書を使用するからだ。教科書は学校の所有物のため、持ち帰ることや書き込むことが禁じられていた。しかし日本では、国が教科書を日本の小中学生全員に配っているのだ。私が調べたところ、文部科学省の調査によると、小学校の教科書は平均一冊四〇三円、中学校は五一七円であるという。現在の日本の小学生六〇五万人と中学生三一七万八千人が皆、自分の教科書を持っていることに、私は感動した。

また、日本に帰国して実感したのは、医療の身近さである。日本は国が税を医療に割り当て、診療報酬制度を管理し、検査や治療の値段が全国一律と決まっているため、保険証があれば全国どこにいても安心して医療を受けることができるのだ。これらは、全て税により成り立っている。

では、米国はどうだろう。ある時、弟が指を骨折し救急外来へ受診したことがあった。米国では医療費の請求システムが一律ではないため、本来は払う必要のない治療費十万円が請求された。さらに後日、紹介された病院に受診しようとしたら、保険の関係によりその病院に行くことさえできなかった。米国では民間の保険が中心で、各病院に検査の値段の決定権があるため、医療費が高額になることも多く、病院に受診できない人も山程いるのだ。このように、米国の医療は自己負担の部分が大きく、国民が平等に医療を受けることができない状態にあるのだ。

米国を経験した私が日本で感じたのは、国が私達を守ってくれているという安心感である。今日も私は環境の整った街で暮らし、不自由なく勉強に勤しみ、必要な医療を受けることができる。使いにくい教科書を使用することも、病院から驚くほどの高額な請求が来ることもない。これらを全て可能にしているのは国民が納税し、それを国が管理しているからだ。税を納めることは皆で現在の日本を支え、更には未来の日本をも育てることだと私は考える。これからも安全に暮らせる日々に感謝をしつつ、税についての知識を深め視野を広げ、日本の未来を担う人になりたい。